

服部匡志眼科医のベトナムでの挑戦 「人を思いやるのに 遠慮はいらない」

11月2日(土)、江戸川大学の学園祭駒木祭で講演会「国際協力の現場 服部匡志眼科医のベトナムでの挑戦」が行われた。同医師は、自身の経験や活動だけでなく、精神力や思いやりを持つことの大切さに

11月2日(土)、江戸川大学の学園祭駒木祭で講演会「国際協力の現場 服部匡志眼科医のベトナムでの挑戦」が行われた。同医師は、自身の経験や活動だけでなく、精神力や思いやりを持つことの大切さに

服部医師がベトナムで活動するようになったのは、学会でベトナム人医師に偶然出会ったことがきっかけだ。ベトナムは貧しい人々が多く、重度の症状になってから来院するため、高度な手術技術が要求される。そこで服部医師の高い技術を見込んだその医師が、「た

だのだ。奥さんを含め、多くの人に反対されながらも2002年から援助活動をはじめた。はじめは3か月という約束だったものの、短い期間ではとても治療が間に合わず、以来、日本とベトナムを行き来しながら活動を続けている

ふだんはハノイ国立眼科病院で、内視鏡を使用した網膜手術を手掛ける。時間を見つけては、頻繁に地方にもでかけ現地の治療もしている。地方に住んでいる患者は貧しいことが多く、病院に来るだけで精一杯だ。そのため、治療費を肩代わりすることもあるようだ。

「人を思いやるのに遠慮はいらない」。講演のあいだ、この言葉がいくども繰り返された。貧しい人や弱い人を決して見捨てない。その強い意志を持っているからこそ、ベトナムでの活動も続けていくことができるとの



壇上から降りて来場者に気さくに話しかける姿が親しみを感じさせた。

著書にサインをしながら、一人ひとりに丁寧な対応をする服部医師。

「医者らしくない医者」であること。医者は神様や特別な存在ではない。皆と同じひとりの人間なのだという。その心だけは講演会でも示されていた。来場者一人ひとりに自ら近付いてマイクを向け、質疑応答には真摯に答える。来場者と同じ目線になって話すその姿は、まさに医者らしくない

医師だ。講演の中では、「目が見えることは当たり前ではない」と強調する。来場者により分かりやすく伝えるため、簡単な実験を行った。それは、目をつむるだけという、子どもにも年配の方にもやりやすいシンプルなものだった。

「人を思いやるのに遠慮はいらない」。講演のあいだ、この言葉がいくども繰り返された。貧しい人や弱い人を決して見捨てない。その強い意志を持っているからこそ、ベトナムでの活動も続けていくことができるとの

TV番組で知るリアルな現地生活

中盤では、およそ20分のTV番組の録画を流した。ベトナムで患者の治療や手術をする様子や、普段の生活を紹介する密着ドキュメンタリーだ。来場者は真剣

だが、一人の活動には限界もある。自身で行う治療と併行して、現地の医師の育成にも力を入れてきた。服部医師の弟子は、すでに50人を超えるまでになった。